

終わりの美学——日本文学における終結——

上田 眞
山 中 光
一 編

終わりの美学

——日本文学における終結——

上田 真 編
山中 光 一

明治書院

終わりの美学

——日本文学における終結——

(国文学研究資料館共同研究報告「日本文学の特質」2)

定価 2,900 円
(本体 2,816 円)

平成 2 年 3 月 24 日 印刷 © 1990 *National Institute*

平成 2 年 3 月 29 日 発行 *of Japanese Literature*
printed in Japan

編 者 上 田 真
山 中 光 一

発行者 株式会社 明治書院
代表者 三 樹 彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社
代表者 田 中 忠

発 行 所 株式会社 明 治 書 院

東京都千代田区神田錦町 1 の 16 郵便番号 101
電話 (03) 292-3741 (代) 振替口座東京 3-4991

ISBN4-625-43057-7

正文社製本

序

国文学研究資料館では、昭和六十一（一九八六）年度の共同研究の一つとして、同年度の客員教授であったスタンフォード大学のマコト・ウエダ教授を中心に館内外の研究者によって「文学作品における終結の原理」というテーマで共同研究を行った。本書はその成果をまとめたものである。

マコト・ウエダ教授は、その日本文学研究の数々のすぐれた業績によって国内国外において令名が高い。同教授の問題提起により館外の研究者の参加をも得て行った共同研究を、ここにウエダ・山中両教授編『終わりの美学』と題する論文集として刊行できたことは、慶賀の至りである。

論文がほぼ出揃った昨平成元（一九八九）年夏、ウエダ教授が短期間来日された機会に、共同研究員が集まり、若干の関係者も加わって、討議の会をした。その要旨も本書に収めた。

ウエダ教授をはじめ、この共同研究に参加されて成果を論文にまとめて下さった方々、討議の会に出席して有益な意見をお示し下さった方々にあつく御礼申し上げます。

平成二年二月

目 次

序	小山 弘志	一
---	-------	---

文学研究における終結の問題	上田 真	五
---------------	------	---

省筆の文法・余情の美学——源氏物語の心的遠近法——	高橋 亨	三五
---------------------------	------	----

異界・物語・時間——読本 よみほん にそくして——	百川 敬仁	七五
--	-------	----

小説の終結の論理——日本の近代文学における、もうひとつの形——	三好 行雄	一〇三
---------------------------------	-------	-----

川端文学における作品終結の原理	上田 真	一二九
-----------------	------	-----

(付) 第一〇回国際日本文学研究集会公開講演

日本文学における「終わり」の感覚(抜粋)	上田 真	一六二
----------------------	------	-----

〃終末〃 感覚のパラドックス	佐伯 彰一	一七五
----------------	-------	-----

東西文学の終結の差異——その検証と成立基盤——	山中 光一	二三
-------------------------	-------	----

△総合討議▽

終わりの美学——文学における終結——

.....三九

(司 会) 小山弘志

(参加者) 新井栄蔵 池田重 上田真 佐伯彰一

スミエ・ジョーンズ 高橋亨 長谷川

泉 ジャクリース・ピジョー 福田秀

本田康雄 三好行雄 山中光一

あとがき.....二六七

執筆者紹介.....二九〇

文学研究における終結の問題

上
田

真

一 終結感の東と西

これはもう数年前のことになるが、サンフランシスコ郊外のある病院で、精神病患者の治療に俳句を使っていると聞いて、担当医のところヘインターヴューに行ったことがある。会って話を聞いてみると、この医師はもとも自分でも英語で俳句を書いていた人で、ふと思いついて患者にも書かせてみたところ、かなり好ましい結果が出たので、以後ずっとその方法を使っているという。もちろん患者はすべてアメリカ人だから、俳句など読んだことがない人も多く、したがって先ず「俳句とは何か」ということから説明してやらなければならない。どう説明するかというと、英語で書かれた詩が俳句となるためには、五つの条件を満たさねばならないと説くのだそうである。その五条件というのを要約すれば、(一) 音節がだいたい五・七・五であること、(二) 現時点に即していること、(三) 季語があること、(四) 終結感がないこと、(五) 比較・対照もしくは調和を含むこと、というようなことになるらしい。これら五条件に簡単な解説を加えたプリントが用意されてあって、それを俳句療法の始めに患者たちへ渡すのだという。

英語俳句の定義についてはアメリカでも議論が多く、いろいろなグループがさまざまな主張をしている現状だが、これら五条件はそれらの最大公約数的なものだといえよう。ただ、ここで面白いのは、この精神科医が患者たちに俳句を書かせてみた結果である。これら五条件のうち、最も多数の患者が

守らないのは第四条件なのだという。患者たちの書いた作品例を私も見せてもらったが、なるほどその通り、多くの作品が強い終結感をもっていた。『去来抄』によれば、芭蕉は「くまぐままで言ひ尽くすものにあらず」と教えたそうだが、これらの英語俳句には、余すところなく言い尽した作品が多かった。そしてこの事実は、精神病患者たちの俳句だけに限らず、英語俳句全般についてもある程度あてはまることのように思われる。今まで英語俳句を書いたアメリカ人の中には、エミー・ロウエルやリチャード・ライトなど高名な詩人がいるが、彼らの俳句には強い終結感がある。もし芭蕉が読めば、「くまぐままで言ひ尽くすものにあらず」と批判しそうな、そんな作品が多い。

英語俳句には、どうして終結感が強くなりがちなのであろうか。理由は明白である。伝統的に英詩には強い終結感があつて、その感覚で俳句を書くから、強い「終わり」の感じをもった作品ができるのである。つまり、英詩の視点からすれば、俳句は「終結感の弱い、あるいは終結感のない詩」だということになる。そしてこのことは、俳句だけでなく、日本文学全般についても、ある程度までいえることではなからうか。だいたい日本人は、文学作品における終結感の重要性を、それほど意識していないのではないか。むしろ、終結感を弱くして、言いたいことを言わずに残しておく方がよいと考えたのではないか。ひょっとすると、終結感のない、あるいは弱いことが、日本文学の一特色となつているのではないか。

現にこの問題は、近代日本の小説を読んだアメリカの学生たちも、しばしば提起してくることであ

る。たとえば永井荷風の『すみだ川』、川端康成の『千羽鶴』、井伏鱒二の『本日休診』など、いずれも名作とされている作品だが、アメリカの学生たちにいわせると、これらの小説がどうしてあそこで終わっているのか、よく分からないという。『すみだ川』の結末では、陽チブスになった長吉が死ぬのか助かるのか、判然としない。『千羽鶴』でも、下宿先から消えてしまった文子がどうなったのか、読者には分からぬまま終わってしまう。『本日休診』ではお町さんが死ぬから、一応の終結感はあるのだが、しかしお町さんは小説のヒロインではなく、小説を構成するいくつかのエピソードの中の一つに出てくる人物にすぎない。他の人物に焦点を合わせれば、あといくらでも小説は続きそうである。このような終わり方は、明確なプロットをもち明確な結末をもった正統的な西洋近代小説を読み馴れた読者たちを戸惑わせる。西洋の文学論では、すでにその淵源においてアリストテレスが作品の構成論を展開し、文学作品には「起首・中樞・終結」の三部分がなければならないと主張しているのに、いま挙げたような近代日本文学の名作は、起首と中樞のみがあって、終結が欠けているように見えるのである。

日本人とアメリカ人の終結感の相違は、他の種々の面にも現れている。たとえば国語の教科書であるが、概して日本では長い作品からの抜粋が多いのに対し、アメリカでは出来るだけ作品の全体を収めようという努力がなされているように思われる。今たまたま手許にある桜楓社発行の大学教養課程用教科書『現代文学選』を見ると、収録してある小説十七篇のうち、葉山嘉樹の『セメント樽の中

手紙』を除いて、あとの十六篇はすべて抜粋である。森鷗外の『阿部一族』や芥川龍之介の『地獄変』がどう始まってどう終わるのか、この教科書だけでは分からない。これに對して、アメリカの大学で日本文学入門用としてよく使われるクノッフ社発行の現代日本文学選集には、二十篇の小説が英訳で入れてあるが、それらはすべて全文が収録してある。谷崎潤一郎の『夢の浮橋』とか倉橋由美子の『河口に死す』などかなり長く、短篇というより中篇と呼ばれるべき作品だが、それでも始めから終わりまで収めてある。『コンテンポラリー・ジャパニーズ・リテラチュア』と名づけられたこの選集がまだ編集の段階の時、編者であるハワード・ヒベット教授にお目にかかったことがあるが、「私は絶対に全文を入れますよ」と強調されていたことを思い出す。このような編集方針はアメリカでは普通のこと、英語英文学の教科書に入っている作品は、その大部分が「起首・中樞・終結」の三分ととのっている。結果として教科書は部厚いものになり、持ち運びには不便だが、高校では廊下のあちこちにロッカーが置いてあって、生徒たちは授業がすんで次の教室へ行く途中に、重い教科書をそこへ入れていく仕組みになっている。

終結感の相違についても一つ例を挙げると、それは小説の連載ということにも現れている。周知のとおり、近代日本ではすでに明治の昔から連載小説が多い。幸田露伴の『五重塔』、夏目漱石の『吾輩は猫である』、島崎藤村の『家』、三島由紀夫の『豊饒の海』など、数限りない小説が新聞あるいは雑誌連載という形式で発表された。必然的に読者たちは、小説を全体として読むよりも、部分

部分に焦点をあてて読まなければならない。作者にしても、部分部分が面白いように小説を書かねばならない。西洋では作者も読者も、部分より全体を重要視する。小説がどう始まってどう終わるかに、より深い注意を払う。英語のセンテンスが大文字で始まって終止符で終わるように、小説にもはっきりした始めと終わりがほしいのである。新聞の連載小説などで、来る日も来る日も小説の中間部ばかり読まされたのでは、読者はやりきれない思いがする。ディッケンズの『ピクウィック・ペーパーズ』など、英米にも昔は連載小説がなかったわけではないが、日本のように隆盛を極めることはなく、近來はすっかり影をひそめてしまった。日本で発行されている新聞でも、英語の読者を対象にした『ジャパン・タイムズ』や『マイニチ・デイリー・ニューズ』に連載小説がないのは、こうした文化の違いが背景にあるからであらう。

文学作品の教科書収録方法にしても、連載小説の有無にしても、その奥にひそむのは終結感の問題である。概して英米人は、よく言えば小説の結末を大事にするのであり、悪く言えば結末に執着するのである。それに対して日本人は、あまり結末にこだわらず、小説の部分部分を楽しむ能力に長けているように見える。そしてこのことは、英米の小説あるいは日本の小説が、伝統的に読者のもっているそうした終結感を前提にして書かれていることをも意味している。とすれば、この問題は文学研究の上において少なからぬ意義をもつ。なぜならそれは、比較文学の対象として材料を提供するのももちろんのこと、もっと一般的に作品構成の問題、テーマ把握の問題、ひいては文学と現実世界の関係

の問題など、文学理論・批評理論の基礎をなす重要な諸問題とかかわってくるからである。西洋で近ごろ作品終結の問題がしばしば取り上げられるようになったのも、故なしとしない。

二 英米における終結研究

英米文学界で作品終結の問題がよく議論されるようになったのは、だいたい一九六〇年代以後である。理論的な研究や、個々の作品に即した研究が、雑誌論文や単行本となってよく見られるようになり、一九七八年には雑誌『ナインティーンズ・センチュリー・フィクション』が、小説の終結原理について特集号まで出している。単行本となった研究書は、すでに一九五八年に出たロバート・M・アダムズの『不協和音の旋律』は別格としても、フラン・フリードマン著『小説の進行』（一九六六年）、デヴィッド・H・リクター著『寓話の結末』（一九七四年）、マリアンナ・トーゴウニク著『小説の結末』（一九八一年）、アーノルド・E・デヴィッドソン著『コンラッドの結末』（一九八四年）、ジョン・ガラック著『結末へ向けて』（一九八五年）など、かなりの数にのぼる。中でもっとも影響力の大きかったのは、フランク・カーモードの『終末の感覚』（一九六六年）と、バーバラ・ハーンスタイン・スミスの『詩の結末』（一九六八年）で、今日における作品終結論の隆盛も、この二著に負うところが大きいの。

カーモードの『終末の感覚』は、当時プリンスツル大学の英文学教授だった著者が、一九六五年秋に

アメリカのプリンモア大学で六回にわたって行った特別講義の原稿を集めたもので、文学論というよりも西洋思想史論といった趣がある。というのも、文学作品の構成原理は、究極的には当代の宇宙解釈の体系に依存しているという考えを著者がもっていて、その立場から西洋文明の流れを概観したからである。したがって、彼の所論によれば、作品の終結感もその時代の終末観と密接にかかわりあっていることになり、どういうふうに作品が終わっているかを研究することは、当代人がどのような死生観をもち、それによってどのように人生に意味を与えようとしたか、それを明らかにすることにつながる。「この本の目的は、問題提起をしてディスカッションの端初をつくることにあり、提起された諸問題への解決を提示しようとは考えていない」と著者は緒言で書いているが、その通りなかなかに刺激的な本である。

それに比べると、スミスの『詩の結末』は、もっと作品研究に重点が置かれている。ペンシルヴァニア大学教授の著者は、もともとニュー・クリティシズムの系統に属する学者で、英詩がどういうふうに関わるのか、その終わり方に深い興味をもち、英詩終結のタイプを分類して見せてくれる。また、作品が終わりになったことを示唆する直接的あるいは間接的な特殊表現があるとして、それについても興味深い記述がある。彼女は、シェイクスピアのソネットを研究しているうち、このテーマに深入りしてしまったらしいが、その守備範囲は広く、現代の英米詩から日本の俳句にまで筆が及んでいる。至るところにウィットやユーモアもあって、カーモードの本よりもはるかに読みやすい。

それにしても、英米文学の分野で、近来このように作品終結の研究が盛んなのは、どういう理由によるものであろうか。主因は、二つあるように思われる。その一つは、二十世紀後半における文学批評界での作品論の隆盛である。今世紀に入ってから英米の文学研究は、従来の歴史的もしくは伝記的な方法を離れ、作者よりも読者もしくは作品そのものに主眼点を置く傾向が強まってきた。その最たるものが、作品の自律性をあくことなく強調したニュー・クリティシズムである。もっとも、今ではニュー・クリティシズムも古くなって、オールド・クリティシズムになってしまったけれども、「作品をどう読むか」に焦点を当てた批評態度は、新しく出てきた構造主義だとか、神話学・記号学的なアプローチにも受けつがれている。そして、作品を研究の対象として扱う場合、どうしても問題になるのは、作品がどう終わるかということである。なぜなら、作品の終結は、いわばその作品の意味のしめくりである。現実の生は混沌としてまとまりのないもので、時間と共にただ流れていくだけなのだが、それをどこかでしめくって意味を与えるのが文学なのである。かつて夏目漱石は、「結末を製造せぬ人生は苦痛である」（『文学評論』）と述べ、「締め括りのある観察を筆にしたのが小説である」（同上）とも言っている。また、司馬遼太郎は、自分がどうして時代小説を書くのが好きか、その理由を説明して、「要するに『完結した人生』をみることがおもしろいということだ」（『私の小説作法』）と書いた。つまり、作品の結末こそ、文学を現実の生から切り離し、文学をして文学たらしめる所以のものだ、ということになる。作品を解釈してその意味を求める場合、作品の終わり方が最

も重要な鍵だとされるのも、十分に納得のいくことだといえよう。

この見地からすれば、近ごろの英米批評界で終結の研究が盛んになったのは、当然の成り行きだと考えられる。スミスが英詩の終わり方を分類して整理したのも、それを使って作品解釈の便宜をはかりたい意向があったからである。英米現代批評を作品論中心に導く原動力となった教祖的人物は、イギリスの批評家I・A・リチャーズだが、そのリチャーズはすでに一九六三年に「詩はどのようなようにして終結を知るか」という題の論文を発表している。ついでにこの設問に対する彼の解答を要約すると、詩に終結をもたらすものは作品に内在する言語的構成要素であって、詩人の体験とか読者の期待とかに関係がない、というふうなことになる。「詩は、言語的に問題を設定することによって始まり、その問題を解決することで終わる」と書いている。四半世紀前のことばだが、現在の英米批評の趨勢を予言したようなところがある。

近ごろ西洋で作品終結の研究が盛んになってきた第二の理由は、二十世紀文学作品の形態変化に関連している。すなわち、今世紀に入って書かれた詩や小説には、一般的な傾向として「終わり」の感覚が微弱だという現象である。十九世紀以前に書かれた西洋文学の作品は、例外もなくはないけれども、大体において明確な大団円をもっていた。小説の結末では、主人公が死ぬか、結婚するか、大人に成人するか、設定した当初の目的を達成するか、とにかくはっきりした結末がそなわっていた。そしてその結末は偶発的なものではなくて、作品全体と有機的に関わりあって、構成上のクライマックス